

学位論文の内容の要旨

専攻	医学	部門 (平成27年度以前入学者のみ記入)	
学籍番号	18D734	氏名	山鳥佑輔
論文題目	The Association between Preoperative Blood Pressure Elevations and Postoperative Adverse Outcomes after Non-cardiac Surgery: A Single-center Retrospective Observational Study		
<p>(論文要旨)</p> <p>【背景】 精神的に緊張している手術前は、平時に比べて血圧が高いと報告されている。いくつかの研究で、術前高血圧の重症度が術後有害事象と関連することが示されている。しかし、平時と比較してどの程度血圧が上昇しているか（ベースライン血圧と術前血圧の差）については評価されておらず、術前の血圧上昇の程度と術後有害事象の関係は必ずしも明らかではない。</p> <p>【目的】 本研究の目的は、非心臓手術患者における術前の血圧上昇の程度が術後有害事象と関連するかどうか、また、それに臨床的な有用性があるかどうかを検討することである。</p> <p>【方法】 2011年1月から2019年6月の間に香川大学医学部附属病院で全身麻酔下の非心臓予定入院手術を受けた成人患者の診療録を後ろ向きに調査した（倫理委員会承認番号2019-189）。同一患者が期間内に複数回の手術を受けた場合、その初回手術のみを対象とし、術前に10日以上入院している患者、データ欠損のある患者は除外した。</p> <p>手術前日血圧と麻酔導入前血圧の差をΔ収縮期血圧（ΔSBP）およびΔ拡張期血圧（ΔDBP）と定義した。手術前日血圧を病棟で測定された手術前日の初回血圧とし、麻酔導入前血圧を手術室入室後に測定された初回血圧とした。評価項目を術後30日死亡、退院後30日以内の予定外再入院、標準的入院期間からの逸脱（over the standard length of hospital stay, OSLOS）とした。OSLOSは日本における平均+2SD日数よりも長い入院と定義し、診断群分類（DPC）データを用いて算出した。</p> <p>単変量解析（t検定）においてΔSBPまたはΔDBPと有意な関連がある評価項目について、多変量解析を行った。多変量ロジスティック回帰分析によりリスク調整を行い、ΔSBPまたは</p>			

ΔDBPが予後予測因子となるかどうかを評価した。ロジスティック回帰分析では、ΔSBPおよびΔDBPを四分位に分け、術前の血圧変化が最も少なかった四分位を基準として、各四分位のオッズ比を算出した。

【結果】

対象は11,732人（平均年齢61歳，男性：47.4%）となった。術後30日死亡，退院後30日以内の予定外再入院，OSLOSの発生率はそれぞれ0.1，0.1，4.4%であった。

単変量解析において，評価項目のうちOSLOSのみがΔSBPおよびΔDBPと関連していた；OSLOS群のΔSBPは35±23 mmHg（平均±SD）であり，標準LOS群の33±22 mmHgより大きく，OSLOS群のΔDBPは10±14 mmHgであり，標準LOS群の8±14mmHgより大きかった（いずれもP<0.01）。術後30日死亡と退院後30日以内の予定外再入院はΔSBPおよびΔDBPと有意な関連がなかった（P=0.09-0.41）。

多変量ロジスティック回帰分析において，ΔDBPはOSLOSと関連があったが（P<0.05），ΔSBPは有意な関連がなかった（P=0.10）。ΔDBPの最大四分位の調整オッズ比（95%CI）は1.31（1.02-1.69）であった。

【結論】

成人の非心臓予定入院手術において，ΔDBPはOSLOSと関連していた。しかし，そのオッズ比は1に近く，OSLOS群と標準LOS群のΔDBPの差はわずかであったため，臨床的に有用なカットオフ値を見出すことは難しかった。また，ΔSBPおよびΔDBPは術後30日死亡，退院後30日以内の予定外再入院とは関連がなかった。

掲 載 誌 名	Acta Medica Okayama			第 卷, 第 号
(公表予定) 掲 載 年 月	2022年 3月 掲載受理	出版社(等)名	岡山大学	
Peer Review	Ⓢ		無	

(備考) 論文要旨は，日本語で1，500字以内にまとめてください。